

入院中の話

自分のことばかり書いても、おもしろくもなんともない。ここでは、一般論としての病院、医師団、看護師、などなど、医療従事者の話を加えていきます。

「勘」と「運」とに身を委ねきって生きてきた。時に細い道を踏み外し、谷底に滑り落ちそうになったが、途中で大木が生えていて、これにひっかかって助かってきた。2019年9月、してもせんでもいいだろうと思いながら受けた検査で、まったく思いもしなかった「異物」がみつきり、少々慌てた。

11月、阪大病院の医師が診察し、ちょっと位置が悪いから、いずれ手術が必要になる。専門家ではないので、その科の医師に相談しますが。・・・このとき、こちらの勝手な仕事の段取りなどを聴いてくれて、とりあえず年末に検査入院をした。・・・このころは、現在、巷を席卷している新型コロナウイルス肺炎が武漢で流行し始めている頃（中国共産党の報告）であったが、台湾以外のどの国も、ここまではこないだろうと呑気なころであった。だから、年が明けて、できれば2月末か3月初めがありがたいんですが。・・・日本にも豪華客船で猖獗を極めている、と報道されはじめ、国内で急速に流行し始めたころ、3月2日の月曜日はいかがですか？と連絡があり、願ったり叶ったりです。その後、3月2日から学校や公的機関、飲食店、などでの人口が密になる場の閉鎖が行われる。

（コロナウイルスについては、別の稿で書きます。）

学校の休校など、子供たちには、はじめてのことだろう。戦争以来のことだから。罹患者や死者の報道が活発になり、4月中旬がピークになり、それから1か月以上にわたる不要不急の外出を控えることが提唱された。・・・これでも遅すぎたのだが。普段は学校に行きたがらない故が、いざ来るな！といわれると、登校したがる。

入院中の話になる。倉谷教授が「どうします？ 手術をしないという選択肢もあります。」・・・せつかくみつかったものだから、もう少し生きて世間に恩返しをしろ、ということだと思えます。手術をお願いします。

そうなると、さすがにプロで、ミリメートル単位で計測し、かなり難しそうだった。

倉谷教授の話。「医学は進歩しています。5年前にはできなかったことが、現在では、ごく普通にできるようになっていますから。」かなり入れ込んでくださって、若い主治医が、「大丈夫かなあ」とつぶやいた。

術前に説明してくれるのだが、こちらも医者の方端くれ。外科のことはよく知らないにしても、説明はよくわかるし、その危険性もよく理解できる。「何か(質問は)ありますか？」 自分への治療に関しては、何も申し上げることはありません。すべてお任せします。 よろしくお願ひします。

手術は、計算通りすすんだそうで、トラブルもなく、3~4時間くらいですんだそうで、ワタシがもっとも心配していた譫妄(せんもう:一見正常に見えるが、じつは意識がなく、周囲が攻撃してくると思ひ込み、必死で抵抗をこころみること)があらわれ、唯一女房の声がかえったときだけ(なにせ40年以上一緒に暮らしていますから)正常にもどったが、その後も暴れるから、一晩ICUで強制的に眠らされた。

翌朝、病棟に連れ戻され、午後にはリハビリテーションだと、200メートル歩かされた。ふらつくこともなかったが、戻ったときの状態は、まるで拘束されているような感じで、話が違ふ(?)と思ひしたが、実は盲腸も含め、メスを入れたことがないから、話は理解できるが体験していなかったただけだ、と自ら気付いて、思わず苦笑した。

ここで超一級の女性看護師に遭遇したのである。親切なのは全員がそうだったのだが、彼女の場合は、当たりが柔らかい、心遣いがこまやかで、ともかくホッとするのである。上ナントカさんで、これは患者としての立場から見たものであるが、医者として見ても同じだろう。いつもはせいぜい2時間くらいしか眠れないのだが、この人のときには5~6時間眠り、目覚めたときの感覚が、静寂、静謐というか玲瓏。水晶にくるまれているような状況であった。僧が悟りを開くときは、こういうものだろうか、とも思ひた。

この病棟に入院することはもうないだろうが、超一級の教授をはじめとする医師団や看護師に遭遇できたことは、大収穫であった。退院するときにも、傍らにいた看護師がバラバラとあつまってくれて、声をかけてくれた。

以前に勤めていた病院では、440人も看護師がいたのだが、超一級と呼べるのは、せいぜい3~4人。2/3は、並以下で、患者さんがもう亡くなっているの

に、「様子を見ます」とか、病室を出ていってしまう。家族は怒るし、結局こちらの時間も費やしてしまった。師長（婦長）なら一流か、といえば、そんなにたくさんはおりません。同じ割合です・・・・・・また嫌われるやろな。